

中国の仏教を訪ねて (その2)

中央仏教学院講師 林 智 康



世々に善導いでたまひ 法照・少康としめしつづ
功德蔵をひらきてぞ 諸仏の本意とげたまふ
(『高僧和讃』善導讃『註釈版聖典』589頁)
善導・源信すすむとも 本師源空ひろめずは
片州濁世のともがらは いかでか真宗をさとらまし

本師源空の本地をば 世俗のひとびとあひつたへ
綽和尚と称せしめ あるいは善導としめしけり

(源空讃 同596頁)

五台山は山西省五台县にあり、文殊菩薩信仰の聖地です。太原の北方、およそ140kmの距離に位置する高峰群の山々です。山頂には、平坦な台状をなす五峯が東西南北中にあるところから五台山と名づけられています。敦煌莫高窟の第61窟に五台山図が描かれています。四川省の峨眉山の普賢菩薩信仰、浙江省の普陀落山の観音菩薩信仰、安徽省の九華山の地藏菩薩信仰とともに四大霊山といわれます。

私たちは五台山の中で、南禅寺・金閣寺・竹林寺・顯通寺(旧華嚴寺)の四ヶ寺を訪れました。南禅寺の大殿は建中3年(782)の再建で、現存する中国最古の木造建築であり、1954年に発見されました。五台山においては最小の寺院であり、それによって廃仏を免れました。金閣寺は海拔2000mのところであり、前日に初冠雪があったようです。平安時代の延暦年間の末に、伝教大師最澄や弘法大師空海と同じ頃に入唐した訳経僧靈仙が五台山に詣り、この金閣寺で不遇の死を遂げたといわれます。靈仙は唐代における經典の翻訳事業に活躍しました。境内の横に彼に関する石碑が建てられていました。

次の竹林寺は、後善導といわれた法照禪師(8世紀頃)が大暦5年(770)に創建されました。著書『浄土五会念仏略法事儀讃』があり、親鸞聖人の

『教行信証』にも引用されています。念仏三昧を修め、五会念仏法といわれる唱名法を普及させました。五会念仏は音楽的なリズムが加えられ、第一会は平声でゆるやかに南無阿弥陀仏を唱え、第二会は平上声でまたゆるやかに念じ、第三会は非緩非急、第四会は漸急、第五会は転急でただ阿弥陀仏の四言を唱えるのです。日本天台宗の第三代座主である慈覚大師円仁(794~864)は承和5年(838)6月44歳の時に入唐し、承和14年(847)9月に博多に帰着しました。著書に『入唐求法巡礼記』があります。五台山竹林寺に15日間滞在し、寺院の構成や戒壇の形態、そして僧侶の動静や法事などを細かく記録し、竹林寺の研究の上にはもとより、唐代の寺院研究についても貴重な資料を残しています。また円仁は念仏三昧にも関心を持ち、比叡山に念仏の教えを取り入れました。

次の顯通寺は、後漢時代に創建されたと伝えられますが、唐代に華嚴寺と称し、清代に至って大顯通寺と改めて今日に至っています。敦煌石窟61窟の五台山図には「大華嚴之寺」の標題のもとに描かれており、五台山の中心をなし格式高い寺です。参拝者や観光客が多く、店も数多く並びとても賑やかな光景が見られました。円仁は竹林寺から顯通寺へ、そして金閣寺へと参詣していますが、私たち一行は短期間で逆コースを辿りました。

最後の訪問地は大同市西15kmにある雲崗石窟です。雲崗は敦煌莫高窟および洛陽龍門とともに中国三大石窟の一つで、2000年に世界遺産に指定されました。5世紀のなかば北魏の時代に開掘されました。武州川に沿って断崖に東西1kmにわたって53窟掘られており、仏像は2cmのものから17mのものまであり、東方部(1~4窟)、中央部(5~13窟)、西方部(14~20窟)、21窟以西の西群諸洞から成っています。現在は中央部と西方部しか見られません。敦煌より遅れること80年ほどで、雲崗の石窟造営は北魏の洛陽遷都(494)後もしばらく続けられ、やがて龍門へと引き続けられます。第20窟は雲崗のシンボルの露天大仏で、高さ13.7mの座像です。

大同市から北京市までの帰途382kmは旅遊道路(高速道路)を利用しましたが、観光バスやタクシーの優先レーンに石炭を積んだトラックが前を妨いだため、かなり時間をロスしましたが、なんとか北京空港に間に合いました。とても、実りある旅行でした。(龍谷大学教授:真宗担当)